俺と燐菜の転生ライフ！！

ヴァーラガルザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と燐菜の転生ライフ！！

【Ｎコード】
Ｎ８６４８Ｚ

【作者名】
ヴァーラガルザ

【あらすじ】
アニメとゲームの知識がもの凄い以外はごく普通の高校２年生、鞍風修也（くらかぜしゅうや）は、親友の時塚燐菜（ときつかりんな）と共に学校へ向かっていたが、交通事故に会い、目覚めた場所にいたのは神様！？　死んでしまった者はしょうがないので、俺は燐菜と一緒に転生することに、これは俺と燐菜が繰り広げる転生ライフである！！

プロローグ１（前書き）

始めてしまった・・・。先行き不安だ・・・。

無理な方は立ち去って下さい

ＯＫな方は全☆速☆前☆進☆ＤＡ！！

プロローグ1

この俺、鞍風修也（くらかぜしゅうや）は何処にでもいる冴えない高校2年生。

ただ一つだけ人とは違うことがあった。

それはアニメやゲーム系統などの知識が、人より多かったことぐらいだ。

今日は、よりによって寝坊してしまい、親友の時塚燐菜（ときつかりんな）と一緒に学校へ急いで走っていった。

だが、急いでいて周りの確認が出来なかったのか、交差点に差し掛かったとき、そこには猛スピードで走ってくる1台の車があった。すでに回避不能な距離にいるため衝突するのを待つばかりの時、俺はこんな事を考えていた。

（こうやって時間が遅く感じるのも今回で3回目か前回と前々回は命の危険性が今回よりも全然なかったからよかったものの今回は駄目だな。ここで死ぬのが運命なのか短い人生だっｔ）

――――ガキ

――――ドン

――――グモッチュイーン

――――ゴロゴロゴロゴロ

俺は燐菜と一緒に車に轢かれた。即死だった。

プロローグ1（後書き）

プロローグだからこんなもんかな？

後から色々とはっちゃけるけど。

プロローグ2（前書き）

プロローグその2です。

神様登場！！

プロローグ2

修也「ん・・・ここは・・・？」

目を開けると、赤いカーペットの地面で、その先には金色の玉座に座っている黒髪の男がいた。

???「・・・・はい、ようこそ天国へ。」

修也「…アンタ誰？」

俺はすかさず尋ねる。

???「お、俺？　俺は神様、ヴァーラガルザ・カーバンクルＤＡ！！　略してヴァクルＤＡ！！」

修也「（地味にうぜぇ・・・。）」

俺は心の中でそう思っていると・・・

???→ヴァクル「誰がうざいって・・・？」

修也「いえ、何でもありません（＾＾；）」

心読む能力あんのかよ！！　迂闊だったぜ！！

修也「そういや神様、ここどこ？」

ヴァクル「何って、さっき言ったとおり天国だが。」

修也「へ・・・」

俺はその言葉に凍り付いた。

やっぱあの時に死んだのは確実だと思っていたが、まさか天国が存

在していると思わなかった。
この際そのことは忘れて・・・
修也「そういや燐菜は何処にいるんだ？」
とりあえず俺は燐菜のことを尋ねる。
ヴァクル「・・・そういやお前ともう一人ここに来たのがいるんだが・・・・。突然逃げだ」
？？？「ドリャアァァァ！！」
ヴァグル「グボァ！！」
ヴァグルが話している途中にツインテール緑髪の女性がヴァグルの腹に跳び蹴りを食らわした。
？？？「ちょっと、どういう事よ！？　やっぱり私死んだの！？」
修也「落ち着け燐菜！　事情は後で説明するから！」
？？？→燐菜「あ、修也もいたの？」
修也「当たり前だ！　一緒に交通事故にあったの覚えてないのか？」
燐菜「え・・・・やっぱり？」
そう言うと燐菜はそのまま気絶した。
修也「そりゃ普通はそうだよな・・・・。」
ヴァクル「全く・・・・、元気な女性だ。」
腰を押さえてヴァクルは起き上がり、話を続ける。
ヴァクルの話からすると、燐菜は俺よりも一足先にここに着いたらしく、目の前の現実が否定できず、逃げ出したという。その後ヴァ

クルが部下から得た情報によると、脱出しようとしたが逃げることが出来ず、元に戻る方法を知るためにヴァクルの元へ戻ってきたと言う。

ヴァクル「と言う訳だ。」
修也「なるほど・・・。」

とりあえず納得する。

ヴァクル「ま、そんなことはどうでも良い。それより、『転生』してみる気はないかな？」
修也「へ？」

突然のヴァクルの言葉に驚きを隠せない俺

ヴァクル「このまま復活させてもいいんだが、それでは面白くないだろ？　もっと面白人生を歩みたいのなら転生をオススメするぜ。」
修也「転生…か……。」

転生モノの小説は何度か読んだことがあるが、まさか本当に神様から転生するかどうかを尋ねられるとは思わなかった。そんな時・・・

燐菜「転生すれば？」
修也「燐菜・・・。」

燐菜が気絶状態から立ち直ったのか、目が覚めてそう言った。

燐菜「確かに家族のことは心配だけど、このまま戻ってしまうのも面白くないわ。だから良いわよ。私も転生させて。」
修也「・・・・そうだな。確かに変わらない人生にも飽きてきたと

ころだ。良いぜ神様。」

俺と燐菜は覚悟を決めた。

ヴァクル「そうか。ならば良いだろう。いや～、あの時二人を轢いちゃったときはびびったな～。」

二人「・・・・オイ。」

ヴァクル「はい？」

二人「今なんて言ったぁぁぁぁぁぁ！！」

俺と燐菜はヴァグルにナックルを喰らわす。そのままヴァグルは壁に激突する。

ヴァクル「ちょっ、タンマタンマタンマタンマ！！　確かに地上でドライブして人轢いちゃったけど・・・・あ（＾０＾；」

二人「全てお前のせいじゃねぇかァァァァァァ！！！」

ヴァグル「ギャアアアアアアア！！！！」

……

ヴァクル「・・・で、要するに転生するんだね。」

タンコブだらけのヴァクルが尋ねる。

修也「ああ、頼む。」

燐菜「変なことしたらたタダじゃおかないからね！！」

俺と燐菜は答える。

ヴァクル「では、とりあえずお二人には力を与える。転生先は結構

物騒だからね。それじゃ・・・・。」

そう言うとヴァグルは二人の下に魔方陣を出現させ・・・

ヴァクル「お大事に。ハァァァ！！」

その一言と共に、二人は魔方陣の赤い光に包まれ、二つの光の玉となって、どこかへ移動した。

ヴァクル「では、この先どうなるか・・・。楽しみだな。」

二人が行った、ヴァクルはクスリと笑った。

???・????

???1「正体不明の光の玉だと？」

神々しい服を着た銀髪の男が椅子に座り、黒い鎧を纏った赤髪の男の話を聞いている。

???2「つい先日、郊外にて正体不明の光の玉が確認されました。」

???1「その後の行方は？」

???2「・・・部下に捜索をさせておりますが、依然として不明。いかが致しましょうか？」

???2は???1に尋ねる。

???1「・・・引き続き調査を続けろ。何かあったら連絡しろ。」
???2「はっ・・・。」

???2はそのまま立ち去る。

???1「・・・何者だが知らんが、この俺の邪魔をするというのなら容赦はせん。」

???1は窓から夜空を見上げそうつぶやいた。

プロローグ2（後書き）

上手くできた方かな？
この小説にはいろいろなキャラを出す予定なので
ネタやキャラのリクエストなどあれば言ってください。

次回もお楽しみに！！

混沌都市ケイオスシティ（前書き）

今回は色々とキャラが登場します。

混沌都市ケイオスシティ

ここは混沌の町、ケイオスシティ。

平行世界政府が置かれている全ての世界の主軸となる大都市。

だが最近、この町にも不穏な影が舞い降りるようになった。

ケイオスシティ第三区域：路地裏

男「た、助けてくれぇぇぇ！！」
人型カルマ「AHHHHHHHHHHHHHH！！」

深夜、住民の一人が人の形をした化け物に追われていた。その名はカルマ。人の欲望から生まれた存在。基本的には自然発生する方だが、つい最近になってからは『ダークネスクロス』と呼ばれる謎の組織が作り出した人造カルマが町の住人を襲っている。

それはさておき、ずっとカルマから逃げていた男は、不幸にも行き止まりにぶつかってしまう。

男「い、行き止まり・・・・？」
人型カルマ「・・・オイツメタ・・・。」

そこにさっきのカルマがやってくる。

人型カルマ「オマエ、コロス。」

このカルマはこの男を殺すつもりだ。

男「やめてくれ、死にたくなぁぁぁぁぁい！！！！」
男がそう叫び、カルマが男を殺そうとした瞬間・・・・
???1「ブラストキャノン！！」
人型カルマ「グェェェ！！」
突如オレンジ色の3発の光弾がカルマに直撃した。カルマは少し遠くへぶっ飛ばされる。
その弾をカルマ目掛けて撃ったのは、ピンク色の髪と学生服にメカメカしい翼を持った少女だった。
さらに・・・
???2「なんと間に合った！！」
???3「危機一髪って所だな。」
???4「うん！！」
さらに金髪のツインテールの少女、蒼髪の女性、銀髪で剣を持った青年がやってくる。
人型カルマ「ググ…キサマラハ…ッ！」
さっきのカルマが起き上がった。
???1「・・・案外タフね。」
男「あ、貴女は自警団の方・・・・。」
???1「そ、私が自警団のリーダー、夢幻白夜。まさか第三区域まで被害が・・・ッ！！」
人型カルマ「ジャマスルナ！！」

カキィン！！

白夜は攻撃を仕掛けてきたカルマの攻撃を、すぐさま魔道防壁を展開して防ぐ

???1→白夜「ゴメン、今は安全な場所に避難して！！」

男「わ、分かった！」

白夜に言われた通り、男は安全な場所へ避難する。

人型カルマ「エモノヲニガシタ・・・・。」

悔しがるカルマをよそに、白夜はすぐさま構える。

白夜「また人造カルマ・・・。やっぱり『ダークネスクロス』が本格的に関わってるのね。」

???2「あの組織が何を考えてるのか知らないけど、今はやるしかないわね！！」

白夜「うん。行くよ、彩音。」

???2→篠原彩音「ええ。」

白夜と彩音は人造人型カルマの方を見る。

人造人型カルマ「オロカナ・・・、ワレワレノジャマヲスルノナラ、ヨウシャハセン。アイニクコッチモナンドモヤラレルワケニハイカナイノデネ。」

そう言うと人造人型カルマは口笛を吹く。すると・・・・

ゴゴゴゴゴ・・・・

白夜「何？」
彩音「白夜、上！！」

彩音が指す方向を見るとそこには・・・

大きな黒い翼を持ち、更に強靱な二つの角がある猛獣が二人の目の前に降りてきた。

彩音「まさか、ベヒーモス！？」
人造人型カルマ「ソウダ、シサクダンカイダガジツリョクハユビオリダ。オマエタチニカテルカナ？」

そう言い人造人型カルマはベヒーモスの上に乗る。

人造人型カルマ「ヤレ。」
ベヒーモス「グオォォォォォォォォ！！！！」

人造人型カルマの合図と共に、ベヒーモスが白夜と彩音に向かって突撃してくる。
二人は避けて距離をとって・・・。

白夜「ブラストキャノン！！」
彩音「トパーズブレイク！！」

白夜はオレンジの光弾を、彩音は雷の魔法をぶつけるが、ベヒーモスに目立ったダメージはない。

白夜「これならどう？　エリアルブラスター！！」

ドォォン！！

白夜はオレンジのビームをベヒーモスに放つ。直撃すると同時に爆発する。だが・・・

人造人型カルマ「ハハハ、それがどうした！？」

当のベヒーモスには効いていない。しかし・・・

彩音「貫った！！　トライデントテンペスト！！」

人造人型カルマ「何！？」

爆発後の煙が晴れると同時に、魔術で具現化させた雷の剣を持ってベヒーモスに近づき攻撃しようとする。しかし・・・

ベヒーモス「グルアァァァァ！！」

彩音「！？　速い！！」

カキィン！！

だが、ベヒーモスの反応の速さは尋常ではなく、さっきの不意打ちにもすぐに対応する。彩音は剣でベヒーモスの攻撃を防ぐ。

彩音「クッ・・・！！」

だが防いでも反動は大きく、少しぶっ飛ばされるがすぐに空中で立て直す。

白夜「大丈夫！？」

彩音「ええ。しかしあのスピードであの攻撃力、相当厄介ね。」
???３「確かにあのスピードと攻撃力は厄介だが、俺はこういう奴の相手は慣れいている。」
???４「アイツの動きを止めて、そのうちに白夜が大技打ち込んでくれたらいいんだけどね～。」
彩音「住民の避難は済ませたの？　氷月、暁絶。」
???３→神無月暁絶「ああ、ちょいと時間がかかったがな。」
???４「全部ＯＫ。で、どうするの白夜？」
白夜「わかった。皆、頼むわ！！」
三人「ええ！！」

三人の声と共に、白夜は右腕にあるカードホルダーからカードを取り出し、そのカードを宣言する。

白夜「スペルカード発動、大空符「滅びのバーストストリーム」！！」

そのスペルカードを宣言すると共に、白夜はクリスタルの中に閉じこもる。

人造人型カルマ「ナニヲスルツモリダ？　マア、アノクリスタルヲハカイスレバカマワンハナシカ。ベヒーモス、アノクリスタルヲハカイシロ！！」
ベヒーモス「ガアアアアアアアア！！！」

人造人型カルマの命令を受け、白夜が閉じこもっているクリスタルを破壊しようと、クリスタルへ突進する。

カキィン！！

暁絶「させんぞ！！」

それを暁絶が防ぐ。

人造人型カルマ「チィッ！　ジャマヲ！！　ヌ！？」

バキューン！　バキューン！

氷月「皆の邪魔はさせないよ！！」

氷月は、冷気の煙をまとった５つの遠隔飛行兵器「ブリザードスター」で、白夜達を援護する。

その頃……

ケイオスシティ・第三区域：外務省前

修也「ん・・・、ここが転生先か・・・。意外と静かなところだな。」

燐菜「そうね。」

転生先について早々、自身の感想を話す二人。

修也「で、これからどうすんだ？」

燐菜「どうするも何も、ここがどこだか分からない以上、迂闊に行動できないわね・・・。」

修也「誰かいないかな・・・ん？」

ここが何処なのか誰かに尋ねようと思ったら、とある男が通りかかる。

???「……。」

とりあえずその男に、ここが何処なのか尋ねる事にした。

修也「あの～、すみませんですが、ここは何処な」

???「……何だ貴様は？」

修也、燐菜「・・・ッ！！！」

一言だった。一言で俺たちはあり得ない程の実力差を感じた。体がこう反応している。

『絶対に戦うな』と。

???「……俺は急ぎの用がある。貴様等に関わってる暇はない。」

その男はそう言い、そのままどこかへ行ってしまった。

修也「……何だったんだアイツは・・・。」

燐菜「さあ……相当危ない奴って事だけは分かったわ。」

修也「そんなことは忘れて、さっさと警察かどこかでも行ってここが何処か教えて貰おう。」

燐菜「……ええ。」

二人はあの男のことが気になりながらも、とりあえず警察を探すことにした。

舞台は戻り……　その頃白夜達は・・・・

暁絶「ハァッ！！」

ベヒーモス「グルウァァァァァァァァ！！！」

ガキィィィン！！！

人造人型カルマ「クソガッ！！」

暁絶「（しかし・・・そろそろヤバイな・・・。）」

暁絶は焦っていた。事実疲れることがないカルマにとって、持久戦は一番有利な戦法。クリスタル防衛で暁絶、彩音、氷月の三人は疲れがたまっている。このままいけばこちら側が持たないのは確実。三人は焦っていた・・・。その時。

パリィーン！！

クリスタルが自動的に割れた。

白夜「お待たせ！！」

彩音「こちら側も頑張ったんだから、しっかりやりなさい！」

暁絶「全くお前という奴は・・・。」

氷月「白夜ー！　いっけー！！」

クリスタルから出てきた白夜は、今までより強力な魔力を放っていた。

人造人型カルマ「なんだこれは！？　この力はいったい何だ！？」

白夜「世界の秩序を狂わせる者よ、その罪と共に浄化せしめん！！」

そして人造人型カルマとベヒーモスの周りに炎の壁が出現する。そして

白夜「プロミネンス・ゼロ！！」

ゴオォォォォォォ！！

人造人型カルマ「オノレェェェェェェェェ！！！！」
ベヒーモス「グオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

人造人型カルマとベヒーモスは白夜の放った炎の竜巻によって、その悪しき魂は肉体ごと完全に消え去った。

白夜「ふう・・・。」
彩音「何とかなったね。」
氷月「見回りも終わったことだし、早く帰って寝よう！　学校に遅刻しちゃうから。」

戦いが終わり、空気が変わり和気藹々とする白夜達。しかし一人だけ違った。

暁絶「……どうやら遅刻は覚悟しといた方が良さそうだな。」
三人「？」

一人だけ戦闘態勢に入っている暁絶の前には・・・

？？？「実験体がやられるとは、さすがという所か。」

…………そこには『鬼』がいた。

混沌都市ケイオスシティ（後書き）

その男は『隻眼の紅い鬼神』と呼ばれていた男、斬覇　紅摩。

次回、ついに主人公とヒロインの力を公開！！

隻眼の紅い鬼神とその頃二人は…（前書き）

隻眼の紅い鬼神、登場！

そして主人公とヒロインの初めての戦い。

隻眼の紅い鬼神とその頃二人は…

白夜「……。」
彩音「……。」
氷月「……。」
暁絶「……。」

四人は動かなかった。いや、この場合は動けなかったと言った方が正しい。
突如四人の前に現れた男。その男はこう言う。

???「俺は斬覇紅摩。『ダークネスクロス』最高位幹部戦闘集団『鳳凰神武』のＮｏ３。通称『隻眼の紅い鬼神』。」
白夜「『鳳凰神武』ですって・・・！？」
暁絶「よりによって『ダークネスクロス』の最高位幹部の一人が登場とは、こりゃ不味いな…。」
紅摩「……これは警告だ。二度と俺たちに関わるな。」

自己紹介の後、紅摩は静かに言う。

暁絶「どういう意味だ？　ふざけてるのか？」
紅摩「巫山戯るのもどうも、俺は本気だ。お前達は二度と関わるな。」

紅摩はまた静かに言う。

白夜「……断る。殺されそうになっている人達を、みすみす見捨てるわけにはいかないから。」

白夜はきっぱりと言う。

紅摩「……何故だ？」

紅摩は静かに尋ねる。
そして白夜はこう答えた。

白夜「私はかつてこの力を使うことは嫌だった。だけど友達がカルマにさらわれて気付いたの。『この力は自分の大切な者達を守るためにある』って！！　だから私は貴方を倒してでも自分の信念を貫き通す！！」

彩音「じゃあ私は白夜に一生付いていくわ。死ぬかも知れないのに仲間のために敵に挑み続けて、私がいないと死んでしまうかもしれないのに。それに一番の理由は、『友達』だしね。」

白夜「彩音……ありがとう。」

白夜の顔が一瞬微笑んだ。

暁絶「と言う訳だ紅摩。」

氷月「白夜達の邪魔はさせないよ～！」

暁絶と氷月も戦闘態勢に入る。

紅摩「残念だ……。笑い話で済めば良いものを……。」

紅摩が戦闘態勢に入る。

紅摩「さて、少しは楽しませてくれ。」

シュンッ！！

白夜「は、速い！！」

ガキン！！

ベヒーモスを軽く超えるスピードで近づき、白夜に攻撃を仕掛ける。
白夜はすぐさまガードをする。

ガキン！　ガキン！　ガキィン！！

紅摩「どうした？　もう終わりか？」
白夜「（速いし攻撃も1発1発に重みがかかっている！！　もう持たない！！）」

あまりの紅摩のラッシュに白夜のガードが外れかけようとした瞬間

暁絶「ファイナルベロシティ！！」
紅摩「！？」

暁絶が遅延魔術『ファイナルベロシティ』を発動する。これは、自分以外の時の流れを遅くする技。
暁絶はこの技で、紅摩に不意打ちをしようとしたが……

ガシッ！！

暁絶「！？」
紅摩「……そんな子供だましが効くと思ったのか？」

ファイナルベロシティ発動中にも関わらず、紅摩はそれを無視して、攻撃を仕掛けてきた暁絶の首を掴んだ。そして……

紅摩「……圧壊(あっかい)」

ドカァァン！！

暁絶「グワァァ！！」

氷月「お兄ちゃん！！」

紅摩の手に捕まった暁絶が爆発し、そのままぶっ飛ばされた。
ぶっ飛ばされた暁絶は、近くの壁に激突してそのまま気絶する。

紅摩「他人の心配をしている場合か？」

氷月「！？」

いつの間にか自分の近くに紅摩が近づいていて、驚いた氷月はブリザードスターで攻撃しようとするが……

紅摩「失せろ。」

そう言い紅摩が地面を思いっきり地面を足で叩くと、紅摩を中心に内側から外側へと火柱が巻き起こり、
氷月を彼女のブリザードスターごと吹き飛ばす。

氷月「キャァァァァァァ！！」

氷月は自身のブリザードスターごと吹き飛ばされる。

白夜、彩音「氷ちゃん（月）！！」

白夜と彩音は氷月の元へ駆けつける。

氷月「ウウ……アイツ、無茶苦茶強いよ……。」
彩音「しっかりして、今治療するから！！」
氷月「ありがと……。」

ボロボロ状態の氷月を、自身の治癒魔法で治療する彩音。

紅摩「この程度とは、ジークフリードに言われ来たのだが、こんな奴ら相手に手間取るアイツもどうかと思うが……ん？」
白夜「……。」

紅摩が目を向けると、そこには左手に光の剣を構えている白夜がいた。

紅摩「……お前は少しはやり甲斐がありそうだな。そこの男は気絶しているから始末するのは最後にするとして……今ここで貴様を始末して、その後にあの二人を始末することにしよう。」
白夜「皆に手は出させない。貴方を倒せば見逃してくれますよね？」
紅摩「……そうだな。確かにそう言うことにはなるが、俺は簡単に倒せる相手ではないぞ。」

白夜の問いに答える紅摩。

紅摩「……そいつらを守りたいのなら、俺をここで倒すことだな。行くぞ！！」
白夜「言われなくても！！」

二人は目の前の敵に駆け出す。

紅摩「ハッ！！」

白夜「ヤァッ！！」

紅摩の蹴りを、白夜は光の剣で防ぐ。
防いだ後、白夜も右手の機械篭手からエネルギー弾を撃ち出す。

紅摩「兜神」

紅摩が振脚すると、彼と彼の回りが火柱になり、白夜が撃ち出したエネルギー弾を打ち消す。

白夜「これは……？」

紅摩「自身を焦熱させる自然干渉能力「灼熱」だ。俺をそこらの炎使いと同じように扱わない方が良い。」

白夜「なるほどね……。」

紅摩の説明に何となく納得する白夜。

白夜「ならこっちも行くわ、雲符「拡散する波動」！！」

そう言うと白夜の手に紫の光弾が発生する。更に周りにオレンジの光弾が６発浮遊する。

白夜「行って！！」

そう白夜が言うと、紫の光弾が衝撃波に代わり、紅摩に向かって飛んでくる。

紅摩「……。」

紅摩はそれを簡単に避けるが……

紅摩「……ッ！！」

紅摩の頬に何かが掠る。
それはさっき白夜が周りに展開していたオレンジの光弾だった。

白夜「この光弾は放って置くとドンドン分裂する。避けてもだんだん当たるわよ。」

紅摩「少しは考えるな……、ならば……。」

白夜の考えに少し感心する紅摩。更に一言言うと紅摩は白夜の視界から消え去る。

白夜「消えた…？　いや、どこからか奇襲を仕掛けてくるはず……。念のために、晴符「ドレインシールド」」

警戒する白夜はスペルカードを発動する。このスペルカードの能力は、飛道具の吸収で体力を回復、更に投げ以外の攻撃を無効化するシールドを周りに張る。

そしてその後……

白夜「…来た！！」

白夜は、2時の方向から炎を纏ってこちら側に近づいてくる紅摩の姿を確認する。

紅摩「堕獄……必定！」

白夜「ドレインシールド防壁強化！！」

紅摩の攻撃が当たる前に、白夜はドレインシールドの防壁を強化する。そして……

ドッカァァァァァァァァァン！！

紅摩の技『夜摩判決』と白夜のドレインシールドがぶつかって……。
その場で大爆発が起こった。

その頃修也達は……

修也「うおっ！！　なんだ今の爆発音は！？」

さっきの突如として起こった爆発に驚く俺。

修也「全く何処なんだよこの町は！？　燐菜、速くここから逃げないと・・・！？」

俺は燐菜に速くここから逃げるように勧めるが……

燐菜「……逃げる以前に、どうやら目を付けられたようね。」

修也「！？」

そう言う燐菜の手には、炎と氷の力をを纏った剣があった。その周りには、どうにもこうにも柄の悪そうな、黒スーツの男達がいた。

修也「それは……？　と言うより、この人達誰？」

燐菜「神様が私とアンタにくれた力、覚えてる？　とりあえずこんな状況だから何か武器がないか探していたら、いつの間にか首にペンダントが付いていてね、何か武器内かな～、って思ってたら、こ

のペンダントが武器になったって事。それにこの人達が誰なのかは不明。」
修也「ナルホドー。で、俺にも付いてるのか？」
燐菜から説明を受けた俺は、首元を調べると、ガントレットのペンダントがあった。
修也「……お、良いじゃんこれ。」
そう思った瞬間、俺の腕に黒いガントレットが装着された。
修也「おわっ！　突然手にガントレット付いたぞ！！　それになんか知らないけど背中に剣が2本も。」
燐菜「そのペンダント、必要だと思ったときのみ武器になるらしいわ。」
驚く修也に燐菜は説明する。
修也「ま、良い武器も貰ったし、さっさとこいつらぶっ飛ばすか！！」
燐菜「ええ！！」
黒服リーダー「やっちまえ～！！」
黒服達「オオオオオオ！！」
黒服達がこちら側に向かってくる。
修也「か、俺から行くぜ！！　オリャァ！！」
ドォン！！

黒服達「ギャアアアアアア！！！」

修也が地面を叩くと、地震が起こり、黒服達の半分を吹き飛ばした。

黒服Ａ「隊長！　コイツ無茶苦茶強いです。」

黒服リーダー「ええい、数ではこちら側が圧倒している、攻めまくれ！！」

黒服達「ハッ！！」

修也「また懲りずに攻めてくる……雑魚敵の宿命って悲しいモノだな……。ハッ！！」

修也は背中から取り出した大剣の一つ『スヴァローグ』を振り回し、周りにいた黒服を吹き飛ばした。

燐菜「じゃ、私も負けてられないわね！！」

燐菜は炎と氷の力を纏った剣『メドローア』を地面に突き刺す。すると……

黒服Ｂ「ギャアアアアアアアアア！！」

その他黒服「熱ちい！！　冷てぇ！！！」

黒服のある者は焼かれ、またある者はカチンコチンになる。

黒服リーダー「そんな馬鹿な！」

黒服「隊長！　もう隊長と私以外いなゴフッ！！」

黒服Ａはリーダーに現状を報告しようとしたら、修也にナックルで

ぶっ飛ばされた。

黒服リーダー「ヒ、ヒイィィィ！！」

修也「さあ、とりあえず何で俺たちを襲ったのか教えてほしいものだな。」

黒服リーダーの目の前にスヴァローグの切っ先を向ける。

黒服リーダー「そ、そんなこと言われても、お前らを始末するように変な少女とよくわからん男からから言われたんだよ！」

修也「変な少女とよくわからん男？」

黒服リーダー「ああ、そいつはお前らの写真を見せて男が『あの二人を殺せ。さもなくばお前とお前の家族の命がないと思え』と脅されて、怖くて仕方がないから……。」

修也「なるほど……。」

燐菜「確かに家族と自分の命がかかってると…ね……。」

黒服リーダーの言葉に納得する修也と燐菜

黒服リーダー「ついでに男の名が『妖晶弐零（ようしょうにれい）』、少女の名が『アンジェ・ラファン』。それに……」

？？？「何をしている？」

修也、燐菜「！？」

突然、金髪で長髪の青年が二人の前に現れる。

黒服リーダー「は、ライルデント様・・・。」

ライルデント「何処に行ったと思えば、こんな所で何をしていた？」

ライルデントの言葉に震える黒服リーダー。

黒服リーダー「い、いえ、自身の命と家族の命がかかっていまして……グホッ！」

黒服リーダーはライルデントに首筋を叩かれ、気絶する。

ライルデント「先ほどは部下が迷惑をかけて申し訳ない。」
修也「いえいえ、こちらこそ。それより此所は何処ですか？」
ライルデント「ここはケイオスシティ。平行世界政府の本部が置かれている都市。私たちはそこの第七区域に住んでいる。」

ライルデントは簡単に説明する。

修也「そうかそうか。ありがとう。おれらもここに来たのは初めだからな（実は転生してきたんだけど……）。」
ライルデント「旅の方ですか……。では、私は急ぎの用があるので、これにて。」

ライルデントは気絶した黒服リーダーを抱えて去っていった。

燐菜「結構優しい人ね。」
修也「ああ、でも……これから何処に泊まればいいんだ？」
燐菜「……忘れてた…。」

修也に泊まるところの問題を問われた燐那はこう答えた。

ドッカァァァァァァン！！

二人「！？」

となりのビルが大爆発を起こした。

修也「オイ、何が起こったんだ！？」

燐菜「修也、見て！！」

修也が燐菜に言われて、爆発したビルの方向を見ると……

白夜「グ……ガ、ハッ！！」

全身から血を流し、血反吐を吐いて倒れ込む白夜の姿があった。

修也「おい！！　大丈夫かアンタ！？」

白夜「誰…か……知らない…けど、速く…逃げ…て…。」

修也が近づいて安否を伺うと、白夜は弱々しい声でそう言った。さらに……

燐菜「修也！！」

修也「！？」

燐菜の声に反応して後ろを向くと……

紅摩「……どうやらまた面倒なのが増えたようだ……」

そこには『鬼』がいた。

隻眼の紅い鬼神とその頃二人は…（後書き）

二人の目の前に隻眼の紅い鬼神が立ちはだかる。

次回もお楽しみに！！

新たなる出会い。（前書き）

今回は結構キャラ出ますよ……

新たなる出会い。

なんだありゃ……。修也は心の中でそう思った。
赤い髪に屈強な肉体、どうにもこうにも俺はアイツを知っている。
転生する3日前にｍｕｇｅｎ動画でＳ軌間を見かけたのだが、アイツはそのＳ軌間そのものだ。
此所は異世界だから多分名前は違うと思うが……。

紅摩「……何だ貴様等は？」

紅摩は二人にに向けて言葉を発した。

修也「お、俺はただの旅の者です。だよな燐菜？」
燐菜「え！？」

修也は燐菜に振る。当の燐菜は焦っている。

紅摩「……そんな嘘はどうでも良い。」

修也のとっさに思いついた嘘はすぐばれる

紅摩「俺にとってはその娘さえ引き渡してくれれば構わんのだが。」

紅摩は傷だらけの白夜を方を見て言う

修也「……の割にはその少女は傷だらけなんだが、お前に引き渡して俺たちに何のメリットがあるんだ？」
燐菜「確かに、用事を聞かないとこっちも簡単には怪我人は引き渡せないわね。」

修也と燐菜は言う。

紅摩「……最低貴様等の命は助けてやると言っている。ただし、その娘を引き渡せばの話だがな。」

紅摩は二人を睨み、そう言った。

その前にどうしてこうなったかを、この作者が説明することにしよう

数刻前……

あの大爆発が起こった後……

暁絶「…ううん……ハッ！！」

紅摩の攻撃で壁にぶっ飛ばされて気絶していた暁絶が目を覚ました。

暁絶「……なんだいまの爆発！？」

暁絶は起き上がって爆発が起こった方向を見ると……

紅摩「……思ったよりはやるようだな。」

白夜「はぁ……はぁ……はぁ……。」

白夜はドレインシールドで紅摩の一撃を防いだのだが、あまりの威力の大きさにシールドが破壊されてしまった。

対して紅摩は疲れる様子もなく、そのまま白夜を見ている。

彩音「白夜……。」
氷月「あいつ、やっぱり強い……」
離れていた彩音と氷月もその様子は映っていた。

紅摩「だが、もう終わりだ。」
白夜「うう……。」
かなり疲労がたまっていた白夜は動けず、そのまま紅摩に首を捕まれる。そして紅摩はそのまま高く飛び上がり……
紅摩「無間に……墜ちろッ！！」
そのまま白夜は真下に投げられ、真下にあったビルに直撃して大爆発する。

彩音「白夜……？　嘘…よね……。」
氷月「白夜ぁぁぁぁぁ！！！」
二人にもその光景ははっきり映し出されていた。

そして今に戻り……

紅摩「どうする。引き渡すか引き渡さないか……、早く決めろ。」
修也「……。」
紅摩の問いにまだ何も答えない修也。そこに……
彩音「白夜、白夜は！？」
彩音がやってきた。
修也「ちょっ、こっちとらお取り込み中なんですけどまた誰か来たぁ！！なんでやって来て早々こんな面倒事だらけなんだぁぁぁぁ！？」
面倒事が多くて思わず本心を叫ぶ修也。そんなことをよそに彩音は白夜の元に駆けつける
彩音「白夜、大丈夫！？　あんな無茶して！！」
白夜「彩音…みんなは……？」
彩音「氷月と暁絶なら大丈夫！　それよりあなたの方が……。」
白夜「それよりあの二人を……」
彩音「え？」
彩音が横を見ると、紅摩と、その前に立っている修也と燐菜の姿が。
彩音「ちょっとあなた達！！　ここは危ないから速く逃げなさい！！」
修也「え？　やっぱここ危険？」
彩音「そうじゃなくて、今この状況が危険って事！！　ボケる必要あるんだったら、速くここから逃げなさい！！」

彩音の警告に適当に返事をして、また彩音に言われる修也。

紅摩「それはどうかな？」

彩音「な……ッ！！」

彩音の目の前にいつの間にか紅摩がいた。

彩音「しまっ……ッ！！」

紅摩「……次は貴様だ。」

油断した彩音に紅摩の攻撃が迫ろうとした瞬間……。

ドォン！！

修也「……こんな可愛いお嬢ちゃんわざわざ見殺しに出来るかって〜の！！」

紅摩「！？」

修也は紅摩の攻撃を受け止めた。

修也「それにアンタ、どうにもこうにも悪役っぽい雰囲気出まくりだっつーの！！　ぶっちゃけアンタを今ここで叩きのめしてもいいんだぜ！！」

紅摩「……なるほど。どうにもこうにも面倒なことになった。どうやら始末する人間が二人も増えたようだ。」

修也の言葉に紅摩は言う。

燐菜「全く、アイツはいつもいつもこんなのだから、こっちも振り

回されるわけで。しょうがない。最後まで付き合うとしますか！！」

燐菜もメドローアを持ち、戦闘態勢に入る。

紅摩「……ならば仕方がない。全員叩き潰すことにしよう。」

紅摩がそう言い戦闘態勢に入ったがその時……

？？？１「どうにも騒がしいから様子を見に来たが、まさかこんな事になっているとわな。」

？？？２「いや、どうにもこうにも、最近これだらけなんだが……。」

？？？３「そんなことどうでも良いのよ！！　速くこの状態何とかしないと！！」

？？？４「腹減った……」

？？？５「いやなんでそのタイミングで腹減るんだ！？」

？？？６「汝、少し落ち着け。」

全員「！？」

突然後ろから声がした。

修也「この声は・・・！？」

燐菜「修也、知ってるの？」

修也「知ってるも何も、あの６人は……」

彩音「ま、まさか……！！」

燐菜「修也よりもあっちの方が驚いてるんだけど！？」

修也を彼よりも驚いている彩音を見て呆然とする燐菜。

修也「アイツらは……、論説部の皆さんにロリコン魔術師とその魔

道書！！」

そう、あの六人は、『天空のユミナ』の論説部の四人、『黒河雲母』、『朱島歩武』、『翠下弓那』、『御木津藍』と、ロリコンで定評のある『デモンベインシリーズ』の主人公『大十字九朗』とその魔術書『アル・アジフ』だ。

???5→大十字九朗「なんで初対面の人にロリコン扱いされなきゃいけないんだよ……。」

???4→御木津藍「大丈夫、一応世界救ったのは後世にに残ってると思うから。」

???6→アル・アジフ「諦めろ九郎。」

九朗「何故だぁぁぁぁぁ！！？」

九朗は初対面の人にロリコン扱いされ呆れてるところに藍とアルのフォローが入る。

???1→黒河雲母「しかしあの男はなぜ私たちのことを知っている？」

???2→朱島歩武「多分弓奈の成績的な意味で……。」

???3→翠下弓那「何であたしのプライベート情報どこからともなく漏れてるのよぉぉぉぉ！！」

彩音「多分、学生の口コミで広がったんじゃないの？」

弓那「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

弓那の成績が外部に漏れている可能性を歩武に言われ、さらに彩音に一言言われ、落ち込む弓那。

修也「（あの神様……、どうやら俺たちをとんでもない世界に呼び出したって事だな……。）」

心の中でそう思う修也であった。さらに……

紅摩「まさか、ここまで騒ぎが大きくなるとはな。」

雲母「お前が何者かは知らんが、ここは撤退した方が良いんじゃないか？」

紅摩「……そうだな。」

雲母が言った後、紅摩は崩れたビルの最上階に飛び乗り

紅摩「さらばだ転生者の二人。また会う日を楽しみにしている。」

修也、燐菜「！？」

その言葉に動揺する二人の様子を見た後、紅摩はそのままどっかへ去ってしまった。

修也「……何でアイツは俺たちが転生者って言うのを知ってるんだ？」

燐菜「……アイツ、相当厄介ね……」

紅摩のあの発言に思い詰める二人であった。

雲母「で、お前達は何者なんだ？　あの男、お前達の事を『転生者』と言っていたが？」

修也「確かに、俺たち二人は転生者だが、何でアイツはその事を知っていたのかが分からん。ちなみに俺の名前は鞍風修也。よろしくな！」

燐菜「私は時塚燐菜。よろしく！」

雲母「修也と燐菜か、私は黒河雲母だ。」

雲母と修也と燐菜はそれぞれ自己紹介をする。

暁絶「何が起こったかしらないが、どうやら何とかなったらしいな。」

氷月「そうみたいねお兄ちゃん。」

あの後、急いで駆けつけた氷月と暁月だったが、何とかなったらしく、安心する二人であった。

彩音「……なんかこうなっちゃたね。あの時はありがとね、修也君。私は篠原彩音。よろしくね。」

修也「あ、どうも。エへへへへ。何か照れるなぁ……。」

彩音の感謝の言葉に、少し照れる修也。

修也「で、さっきの彼女は？」

彩音「白夜のこと？　何とか私の治療魔術で一命は取り留めたけど、あの子基本的にいつもこうだから、いつも私たちを守るためにいつも真っ直ぐ敵に向かっていって、場合によっては命に関わる大怪我までしてさ……。」

確かに改めて白夜の方を見ると、彼女は顔以外の部分をほとんど包帯に巻かれている。それほど傷がひどかったらしいと伺う修也であった。

修也「苦労してるんだね……。で、一つ聞きたいんだけど。」

彩音「何？」

修也「泊まる所ってない？　今のところ宿無しだからさ、こっちとら。」

？？？「その心配はない」

全員「！？」

突如天から声がした。

修也「うげ…あの声は……。」

燐菜「まさか……」

その後降りてきたのは……

ヴァクル「ハーハッハッハッ！！　久しぶりだ二人とボガッ！！」

二人「何やってんだおんどりゃぁぁぁぁ！！！！！！」

突然やって来たヴァクルをドロップキックする修也と燐菜。

ヴァクル「イテテテテ、いきなりなにすんじゃ～！！」

修也「いきなりも何も、いったい何なんだこれは！？　つーかケイオスシティって何だ！？」

ヴァクル「落ち着け落ち着け。こっちとらお前らに住居与えようかと思ってきたんだが。」

修也「何だって！？」

ヴァクルの言葉に衝撃を隠せない修也。

ヴァクル「一応物騒な町だ。力与えただけじゃあ物足りないと思って、困っていたから用意してやろうと思って。」

修也「なるほど。そりゃ有り難いけど。で、何処に用意するんだ？」

修也の質問にヴァクルは……。

ヴァクル「ちょっとそこの包帯巻いてるお嬢ちゃん？」
白夜「え……！？」
ヴァクルの突然の言葉に、動揺する白夜。
ヴァクル「アンタの家のすぐ隣、たしか誰も使ってなかった土地があったよな？」
白夜「え！？　ええ。確かにありましたけど。」
ヴァクル「そこの二人の家、建てといたから。後ヨロシク。」
白夜「え！？」
突然の言葉に唖然とする白夜。
白夜「別に構わないけど……。」
とりあえず了承する白夜。
修也「……これで良いのか？」
ヴァクル「大丈夫だ。問題ない。」
修也「イーノック調で言うなぁぁぁぁ！！」
九朗「何かよくわからねぇやつだな。あの神様。」
アル「確かに、あの男があの二人を転生させたのはあの神だという事も仮定は出来ん。何というか、軽い奴だな。行くぞ九朗。」
九朗「あ、ああ。」
修也とヴァクルの話を余所に、九朗とアルはそのまま帰って行った。
修也「すまん！！　本当っにすまん！！！」

白夜「気にしなくても良いです。彩音を助けてくれたこともありますし。」
修也「ありがとう。感謝してます！！」
修也は白夜にもの凄く謝ってたが、白夜は穏やかに認めてくれた。
ヴァクル「はい。じゃ、地図は渡して置くから。」
燐菜「あ、どうも。（結構無理矢理ね……ハハハ……）」
ヴァクルから住居の地図を渡された燐菜は、心の中で苦笑いをしていた。
ヴァクル「では、俺はこれで、バーハーハーイ！」
ヴァクルはそう言うと、そのまま天に戻っていった。
修也「しかし、全くあの神様もはた迷惑なことしてくれるなぁ……。はぁ……、むっちゃつかれた。」
燐菜「ホントねぇ……」
今回の色々とした騒ぎに二人は疲れ果てていた。
白夜「じゃあ、速くあなた達の家に行きましょう。速く疲れ取らないとね！！」
修也、燐菜「はーい。」
白夜の言葉に二人は返事をし、そのまま向かって行った。
彩音「ちょっ、白夜～、待って～！！」
氷月「みんな待ってよ～！！」

暁絶「やれやれ……」

白夜の後を追うように三人もそのまま向かって行った。

ヴァクル「……修也にはあのガントレットを与えたつもりだったのだが……あんな剣2本も与えた覚えないぞ。いったいそう言うことだ？」

ヴァクルは戻る前に少し考えていた。

その頃……

ケイオスシティ・???

???1「は？　ビルが爆発を起こした？」

???2「はい、怪我人は誰もなかったらしいですけど……。」

ここはとある屋敷の中。その中で、黒い服を着た男が煙草を吹かしながら、別の黒い服を着たテニスラケットを所持している青年が報告を聞いていた。

???1「……上が言っていたあの二つの正体不明の光も関係してるかもしれん。調査を続けろ。」

???2「はい。」

青年はそのまま立ち去る。

???1「……面倒なことになりやがった……。何かこの先、やべぇことにになりそうだな。」

男はそう呟いた。そして最後に……

???1「最近マヨネーズ足りなくなってきたな……、買いに行こう。」

男はそう言ってマヨネーズを買いに向かった。

新たなる出会い。（後書き）

まあ、更に増えるつもりだけど。

次回もお楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8648z/

俺と燐菜の転生ライフ！！

2011年12月29日17時49分発行